

# 「アダット」から「アガマ」へ ——現代バリにおける悪魔祓い サブ・レゲール儀礼の復活<sup>1</sup>

梅田英春

## はじめに

2009年7月11日、ホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団 Yayasan Homa Traya Dwijendra Acarya は、自らの主催でバリ南部のクタ海岸において、共同サブ・レゲール sapu leger 儀礼を開催した。ラジオ放送を通して開催日時と場所、儀礼のための費用を告知し儀礼の参加者を募っただけだったが、申込者は約80名、それに付き添った家族も含める数百人の参加者がクタの海岸を埋めたという<sup>2</sup>。

この財団は、高僧プダング Pedanda でありインドネシアのヒンドゥー教を統括するインドネシア・ヒンドゥー教協議会 Parisada Hindu Darma Indonesia (以下、呼称であるパリサダ・インドネシア Parisada Indonesia と表記する)の幹部の一人<sup>3</sup>、イダ・プダング・ゲデ・ナベ・バン・ブルアン・マヌアバ Ida Pedanda Gede Nabe Bang Buran Manuaba が主催する団体である。主催者であるマヌアバは、バリの民放テレビ局<sup>4</sup>に出演して宗教講話を担当したこともあり、バリではひじょうに知名度の高い高僧である。

サブ・レゲール儀礼とは、特定の七日間に誕生した者に対して行われる浄化儀礼のことであり、宗教的職能者としての能力を身につけたワヤン wayang の人形遣い、マンク・ダラン mangku dalang により執り行われる<sup>5</sup>。しかし、この儀礼は1950年代後半からパリサダ・インドネシアの主導によって始められたバリの宗教改革の中で、「アガマ agama (宗教)」ではなく、地方の宗教的観念、地方的慣習である「アダット adat (慣習)」に類別されたことから、その後、儀礼が徐々に行われなくなり、バリの人々にほとんど忘れ去られた儀礼となった(梅田 2006 : 277)。

その儀礼が、2009年7月にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団によって執り行われた共同儀礼として復活したが、そこで行われた儀礼の在り様は、従来のサブ・レゲール儀礼と大きく様変わりしていた。本来儀礼を執り行うはずの祭司であるマンク・ダランは儀礼の補佐役となり、ワヤン上演とは無関係な高僧ブダダが、浄化のための聖水を灌頂する儀礼へと大きくその方法や手順が変化してしまったのである。

本論では、ホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団によって行われたサブ・レゲール儀礼の概要を記述するとともに、これまで行われてきたサブ・レゲール儀礼との相違に言及し、その変化の背景や要因について明らかにすることを目的とする。なお本論では、2010年8月29日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団が主催して行った三回目のサブ・レゲール儀礼を中心に論じることとする。

## 1. サブ・レゲール儀礼の概要

サブ・レゲール儀礼とは、210日を1年とするウク wuku 暦に基づいて行われる浄化儀礼である。ウク暦は、7日を単位とする30のウクで構成され、各ウクには個有の名称が付されている。この27番目のウクをワヤンと呼ぶが、このウク・ワヤン wuku wayang に誕生した子どもを浄化する儀礼がサブ・レゲール儀礼である。ウク・ワヤンに誕生した子どもに対して浄化儀礼が必要な理由は、以下に示した儀礼の起源神話『カラ・プラーナ Kala Purana』の中に示されている (Hooykaas 1973 : 170-187)。

シワ Siwa 神にはカラ Kala とまだ小さなパンチャ・クマラ Panca Kumara という名前の息子がいた。羅刹の姿をした兄は、自分の生まれたウクと同じウク・ワヤンに誕生した者を食べることを父親より許されていた。ところが、弟のパンチャ・クマラもまたウク・ワヤンに誕生していたのである。サブ・レゲール儀礼の起源神話は、兄カラが弟パンチャ・クマラを食べるために逃げ惑う弟を探し求めるといふ兄弟譚である。この儀礼の起源神話の中でパンチャ・クマラを救うのは、四辻でワヤンの上演していたマンク・ダランである。パンチャ・クマラを楽器の共鳴筒の中に隠したマンク・ダランはワヤンの上演を続けるが、カラは一時、弟を探し求めていることを忘れてそのワヤンに魅了されてしまう。しかし我に返っ

た兄は空腹に耐えきれず、ワヤン上演に必要な供物を食べてしまうのである。マンク・ダランは供物を食べてしまったカラを咎め、カラはダランとのさまざまな問答の末に自らの非を認め、結果的には「カラが食べてしまったワヤンの上演のための供物」と「ウク・ワヤンに誕生したパンチャ・クマラ」は等価交換された。つまり、ウク・ワヤンに誕生した子どもは、マンク・ダランによって上演されるワヤンと供物により救済されたのである。この儀礼の起源神話が物語るように、サブ・レゲール儀礼を執行する祭司は、神々をも魅了させることができるワヤンの上演ができる技量と、すぐれた宗教的職能者としての能力をもつマンク・ダランでなければならないとされる。

サブ・レゲール儀礼の実施主体は、ウク・ワヤンに誕生した者のいる親族であり、この儀礼を行うために、親族はマンク・ダランに対し直接依頼を行う。ウク・ワヤンに誕生した者の家族はダラン宅を訪れ、必要な供物やサブ・レゲール儀礼のための特別なワヤンの舞台の構造などについてダランから教示を受けた上、儀礼当日までに自宅の敷地内や集落の集会場に、多くの供物とワヤンの舞台を用意し(写真1)、オトナン otonan とよばれるウク暦に基づいた誕生日(サブ・レゲール儀礼の場合は必ずウク・ワヤンの7日間)に儀礼が行われる。

供物の種類や数などは儀礼の規模により異なるが、マンク・ダランによるサブ・レゲール儀礼のためのワヤン演目の上演と聖水の準備(写真2)、聖水の灌頂(写真3)というプロセスはサブ・レゲール儀礼には不可欠である。上述したように儀礼の規模により供物の種類や数には増減があるが、それでもその種類が多いことから費用を捻出することが難しく、以前から経済的理由で儀礼を行うことができないという事例はひじょうに多かった。このような人々に対して、マンク・ダランは供物の準備やワヤンの上演を省き、聖水の灌頂だけを行う方法で対処する場合もあるが、それらは単にウク暦に基づく誕生日であるオトナン otonan ごとに行う浄化儀礼であり、サブ・レゲール儀礼とは見なさ



写真1 ワヤンの舞台と供物



写真2 人形を使った聖水準備



写真3 マンク・ダランによる聖水灌頂

れずに緊急避難的な対応と捉えられている。

こうしたサブ・レゲール儀礼は、すでに述べたように1950年代後半からパリサダ・インドネシアによって始められたパリのヒンドゥー教の合理化の中で、「アガマ」ではなく「アダット」に類別されていったが、だからといって、この儀礼が「アダット」として教義や經典の中に明文化されたわけではなかった。

この宗教の合理化の中で作成されていった教義の中で、ヒンドゥー教協議会は宗教的職能者を、*プンデタ pendeta* (あるいはスリング *sulinggih*) と*ピナンディタ pinandita* に大別した (Parisada Hindu Dharma Pusat 1985 : 66)<sup>6</sup>。前者は最高位の宗教的職能者であり、自身がシワやブッダと一体になり、マントラ (真言) やムドラ (印行)、さまざまな祭器、花などを用いて聖水を作る大きな儀礼を司るためには不可欠な存在である。他方、*ピナンディタ* は*プンデタ* の補佐役と位置付けられ、定期的に行われる寺院の祭礼と、寺院の祭礼以外の通過儀礼を執行する権限は認められたが、これらの祭礼において*ピナンディタ* は*プンデタ* の準備した聖水を用いなければならないことになった (梅田 2006 : 270)。パリサ

ダ・インドネシアは、マンク・ダランを後者のピナンディタに類別した。さらにその後に行われた州政府主催のワヤンのセミナーなどにおいて、マンク・ダランの役割は儀礼におけるワヤンの上演に限定され、あくまでもブンデタの補佐役と位置づけた上で、その従来の役割から、聖水準備や浄化儀礼を行う祭司としてのマンク・ダランの役割を剥奪したのである（梅田 2006：272-275）。その結果、たとえピナンディタであるマンク・ダランが人々に対して浄化儀礼を行ったとしても、教義上それは正統な「アガマ」における儀礼とは見なされないことを意味した。

もっとも、合理化されたヒンドゥー教の教義の中から、マンク・ダランの宗教的役割の一部が排除されたからとはいえ、「信仰」の中に生きてきたサブ・レゲール儀礼がすぐに実践されなくなったわけではなかった。しかし、教義の内容が宗教教育によってバリの人々の中に浸透していく過程で、儀礼の経済的負担も相まって、この儀礼が徐々に行われなくなっていったことは事実である。その儀礼の減少過程において、マンク・ダラン自身がその儀礼で上演するワヤンの演目や伴奏音楽に手を加え、娯楽的要素を追加するなどの創意工夫により、その儀礼の復権を試みたが（梅田 2005：53-60、2006：74-95）、その甲斐なくバリ社会の中から少しずつ忘れ去られていった。

## 2. ホマ・トゥラヤ・ドウウィジェンドラ・アチャルヤ財団によるサブ・レゲール儀礼の概要

冒頭に示したように、2009年7月11日、ホマ・トゥラヤ・ドウウィジェンドラ・アチャルヤ財団は、これまで見られなかった全く新しい形態の共同サブ・レゲール儀礼をバリで開催した。財団は、その儀礼の名称を「サブ・レゲールの祓除 Pebayuhan Sapu Leger」とし、ラジオを通して儀礼の参加者を募った。なお、その中では儀礼の費用が一名50万ルピアであることを明示した（Putrawan 2009: 21）。

この結果、第一回目のサブ・レゲール儀礼には約80人の申込者があり、実際にはその家族も付き添いとして儀礼に参加したことから会場のクタ海岸は混雑し、加えて駐車場の不足などの問題が生じたことから、儀礼の実施に混乱をきたしたという<sup>7</sup>。この盛況ぶりは財団の予想をはるかに超えるもので、儀礼の成功によ

り次のウク・ワヤンである2010年1月31日行われた二度目の儀礼は、クシマン村の海岸沿いに新たに建築された寺院に会場を変更して、280人の申込者を集めて行われた<sup>8</sup>。その後、財団は現在（2012年）に至るまでこの寺院においてサブ・レゲール儀礼を継続している。

本論文が研究対象とした三度目のサブ・レゲール儀礼の準備段階において、財団は新たに儀礼紹介のリーフレットを用意した上、事前にテレビや新聞などに記事を掲載し、申込み方法、料金などを詳細に明示した。特に「ホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団、サブ・レゲール儀礼の実施を復活」という見出しで、バリの大手地方紙であるバリ・ポスト Bali Post に紹介された掲載記事の効果は高く<sup>9</sup>、バリ全土から約550人以上の申込みがあった。この時の一人あたりの費用はブダングによって行われる浄化儀礼（マンディ・ウェダ *mandi weda*）の費用が5万ルピア、サブ・レゲール儀礼の費用が55万ルピアであり、最初にブダングによる浄化儀礼の後、サブ・レゲール儀礼の聖水灌頂が行われることから、サブ・レゲール儀礼を受けるためには60万ルピアが必要だった。申込者の大半は新聞やテレビを見て、ウク・ワヤンに誕生したというだけで儀礼の意味もわからずに、ブダング宅（財団）に遠方から来訪し、費用だけを支払って帰っていったという<sup>10</sup>。

儀礼当日は、寺院の入口に財団主催のサブ・レゲール儀礼の横断幕が張られ（写真4）、費用支払時に受領した番号や記号が書かれたカードを儀礼着の上に付けた約550人の申込者に加えて付き添いの家族も合わせると1000人以上の人々が会場である寺院を訪れた（写真5）。

午後4時、パリサダ・インドネシアのパリ支部長の挨拶からはじまり、寺院の神々への祈禱をはじめとした一連の行事の後、共同サブ・レゲール儀礼が始まった。複数のブダングが聖水の準備を始め、それと同時に、スクリーンを用いないワヤン・ルマ *wayang lemah* の形態で、ブラフマナ階級のダランによりサブ・レゲール儀礼のためのワヤン上演が開始された（写真6<sup>11</sup>）。

従来のサブ・レゲール儀礼においては、この儀礼のための特別なワヤン演目は重要な役割を持っているが、この儀礼においてはこの演目が寺院の隅で上演され、マイクで音を拡声することもなかったため、参加者はその上演に気が付かないほどだった。ダランは上演を終えた後に人形を使って聖水の準備をしたが、結果的





写真4 儀礼会場の横断幕



写真5 参加者とその家族



写真6 ワヤンの上演



写真7 プダンダによる聖水灌頂

にこの聖水は財団が行うサブ・レゲール儀礼には用いられなかった。ダランはすでに財団の要望によって昨晚のうちに聖水を準備して主催者にわたしてあり、すでに「人形の聖水」はプダンダのもとに用意されていた。プダンダの聖水準備が終了後、5、6人ずつ聖水灌頂が行われたが、人数が多いためにマイクで番号が告げられた順に5人のプダンダによって5か所に分かれて行われた（写真7）。聖水の灌頂を終えた段階で儀礼は終了するが、最終的に全員の聖水灌頂が終わったのは午後9時頃である。

### 3. 従来のサブ・レゲール儀礼との比較考察

ホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団が主催したサブ・レゲール儀礼と、従来のサブ・レゲール儀礼と大きく異なる点は大きく四つに整理する

ことができる。一つ目は、その実施主体がウク・ワヤンに誕生した者の親族ではなく、一財団が主体となって大勢の申込者を集めて共同で行っている点、二つ目には、その儀礼にかかる費用が極端に少ない点、三つ目には、儀礼を司り、聖水を灌頂する宗教的職能者が、マンク・ダランではなくプダングにかわった点、そして四つ目は、これまでは「アガマ」に類別されなかったはずのサブ・レゲール儀礼が、パリサダ・インドネシアの関係者により実施された点である。ここでは、この四点についてそれぞれ比較考察を行っていく。

従来のサブ・レゲール儀礼の実施主体は、ウク・ワヤンに誕生した者がいる親族である。これまでの慣習では、親族がマンク・ダランにサブ・レゲールの依頼をすることで儀礼は成立したが、財団が実施主体になった儀礼では、財団がウク・ワヤンに誕生した参加者を募る方法をとった。すでに述べたように、財団は2009年、初めてこの儀礼を開催するにあたりラジオで告知し、その後、回数を重ねるにつれて新聞などのメディアを利用して、参加者を増加させていった。

バリにおいて、儀礼の実施主体が変化し、儀礼が共同で実施されることは今や珍しいことではない。鏡味は、バリの火葬儀礼を事例にあげて、本来、死者の家族が主催者となる儀礼が、2003年に集落の行事として催されるようになった火葬実施体制の変化について論じている（鏡味 2005：544-545）。また火葬儀礼だけでなく、今や行政単位が中心になり、数百人単位の削歯儀礼、結婚式、火葬以降の葬送儀礼などが共同で行われるようになっており、サブ・レゲール儀礼もそうした一連の儀礼の共同化の中で実施されたものと考えるのは間違いではない。しかし他の儀礼と異なるのは、サブ・レゲール儀礼そのものがバリの人々に忘れ去られ、ほとんど行われなくなっていた儀礼であった点であり、新たな儀礼の実施体制の変化は、忘れ去られようとしていた儀礼の復興へと繋がった点である。

費用の点では、従来のサブ・レゲール儀礼に比べると著しく軽減されている。これまではサブ・レゲール儀礼を個人で依頼して行った場合、その費用の総額は、1200万から1500万ルピアだと言われる。その大半は膨大な量の供物を準備するための費用である。ところが、今回の新しく始まった2009年のサブ・レゲール儀礼では、一人当たりの負担は50万ルピア（第三回目からは60万ルピア）で、個人で依頼した場合の30分に1に軽減され、その違いは明白である。信徒の経済的負担の軽減については、2009年の第一回目のサブ・レゲール儀礼の開始前のパリサダ・



インドネシアのバリ支部長による挨拶の中でこの儀礼の主目的として言及されている (Putrawan 2009 : 21)。さらに財団の主催者であるマヌアバも、インタビューの中で以下のような説明を行っている<sup>12</sup>。

現在、サブ・レゲール儀礼が行われることは稀である。しかしウク・ワヤンに誕生した子どもを不浄視する考え方がなくなったわけでない。ここ数年の間に、ウク・ワヤンに誕生した不浄に関するさまざまな相談を受けるようになったが、その内容の多くは、サブ・レゲール儀礼を行いたくても経済的理由から実施できないというものだった。確かにサブ・レゲール儀礼の出費は多い。普通に行っただけでも1500万ルピア程度の費用が必要だろう。これは一般のバリ人が支払う額としては高額すぎる。このような経済的な理由から儀礼ができる者とできない者が出てくることに疑問を持たざるをえない。経済的負担を軽減させるための大規模な共同火葬儀礼や共同削歯儀礼は、今やバリだけでなくインドネシア各地行われるようになってきている。それならばサブ・レゲール儀礼も同様に共同で行うことで個人の出費を大きく抑えることができるのではないかと？ 財団がこの儀礼を開催した目的は、あくまでも信徒の経済的負担を軽減することによって、ヒンドゥー教徒の誰もが、必要な儀礼を受けられるようにすることだ。

パリサダ・バリ支部長による挨拶や上述したマヌアバが語るように、この儀礼の第一の目的が信徒の経済的負担の軽減であることが明らかである。しかし、ここで興味深いのは、この儀礼執行の契機ともいえるマヌアバに対するサブ・レゲール儀礼に関する質問が「数年の間」に増加した点である。これまでの調査から考えれば、バリの人々はこの儀礼の存在すら知らないものが多く、こうした相談がなぜ増加したのかという点に注目する必要がある。実際のところ、こうした質問はマヌアバのような高僧のところばかりでなく、マンク・ダランに対しても頻繁に行われるようになってきている<sup>13</sup>。この背景にはインドネシア芸術大学教員ウィチャクサナ I Dewa Ketut Wicaksana によって書かれたサブ・レゲール儀礼に上演されるワヤンに関する書籍の刊行 (2007年) があげられる<sup>14</sup>。バリの大手出版社の一つから刊行され、宗教的内容よりもむしろワヤンの文学的、演劇的側面に関

する記述が大半を占めるが、この本は大抵の書店では宗教書のコーナーに配架され、バリ全土で簡単に手に入れることができたために、人々はこの儀礼やワヤンの存在を再発見し、その結果、この儀礼には莫大な費用が必要であることを知るのである。

このように大規模なサブ・レゲール儀礼が、人々の経済的負担軽減を目的に行われた一方で、従来の方法でサブ・レゲール儀礼を行うならば、教義に規定されたマンク・ダランの宗教的役割を逸脱し、「アダット」に類別された儀礼を財団が執り行うことになる。パリサダ・インドネシアが主催するのではなく自身の財団が主催するサブ・レゲール儀礼とはいえ、財団の主催者であるマヌアバは、パリサダ・インドネシアの要人であり、教義との間に齟齬を生じさせることなく儀礼を執行する必要があった。そこでマヌアバは、儀礼の方法そのものに変更を加え、儀礼の祭司であるはずのマンク・ダランを以下のように説明して、教義に沿った新たな解釈を行う<sup>15</sup>。

マンク・ダランはピナンディタであり、スリングではある。スリングは聖水を自らの力によって準備するが、マンク・ダランは「聖水を作る」のではなく、「神々の人形が聖水を作る」のであって、彼らはその媒介者に過ぎない。しかしサブ・レゲール儀礼にはマンク・ダランによって上演されるワヤンは必要であり、マンク・ダランが人形の力を借りて準備する聖水が必要であることを否定したりはしない。神話がそれを語っているからだ。しかし、サブ・レゲール儀礼の演目を上演し、聖水を準備するのはブラフマナ階級のダランでなくてはならないし、その聖水を灌頂するのは、プダダのようなスリングでなくてはならない。そして儀礼で重要なのは、「人形の聖水 tirta ringgit」だけでなく、プダダの準備する聖水もまた必要不可欠なのであり、その二つがあってこそサブ・レゲール儀礼である。

この儀礼の規則に関する変更は、マンク・ダランのようなピナンディタに類別される宗教的職能者は、ブンデタ（スリング）の補助的役割を果たすという教義、さらに、ブンデタ（スリング）が準備した聖水を用いなくてはならないという教義の内容に基づいて行われていることがわかる。その理由は、マンク・ダランの

儀礼における補助的役割を強調するために、サブ・レゲール儀礼にはブダダの準備する聖水を必要不可欠なものとする規則と、マンク・ダランではなく、ブダダ自身が聖水の灌頂を行うという規則を新たに加えているからである。更に、あらゆるカスタ *kasta* が就任することのできるマンク・ダランのうち、ブラフマナ階級のダランだけがこの儀礼に関与することができるという、教義とは無関係の、最高位のカスタであるブラフマナ階級を宗教的職能者として優先するという新たな規則まで付与してしまった<sup>16</sup>。この結果、サブ・レゲール儀礼はブンデタ（スリング）が執行する儀礼へと変わり、ブラフマナ階級に限定されたダランは、儀礼のための演目を上演し、人形の聖水を準備する二つの役割を演じるだけで儀礼における使命を果たすことになったのである。しかしこの儀礼の規則の変更によって、サブ・レゲール儀礼は、パリサダ・インドネシアの教義との齟齬が解消され、それは同時にこの儀礼が「アダット」から「アガマ」へと実質的には格上げされたことを意味した。

従来、「アダット」に類別されてきたサブ・レゲール儀礼には全く無関心だったパリサダ・インドネシアは、儀礼の規則の変更によって、掌を返したようにこの儀礼に接近した。2009年にはじめて行われた共同サブ・レゲール儀礼の冒頭で行われたパリサダ・インドネシアのバリ支部長の挨拶の中では、パリサダ・インドネシアは、ホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団と協力関係にあることに言及している（Putrawan 2009 : 21）。このようにパリサダ・インドネシアのバリ支部長の挨拶が最初に行われることで、財団が行うサブ・レゲール儀礼は、公的機関によって公認された儀礼であるという「お墨付き」を得ることになった。パリサダ・インドネシアの要職にあるマヌアバは、この組織がこうした儀礼に対して協力的であることについて次のように言及している<sup>17</sup>。

ヒンドゥー教の儀礼は、インドネシア全土において、貧富の差にかかわらず、すべての教徒に対して行われなければならない。しかし、これまでのサブ・レゲール儀礼はそうではなかった。わたしたち財団が行ったサブ・レゲール儀礼はもはやバリの一部で行われていたような秘儀ではない。今後は、私たちが行った正しい方法によって、バリだけでなく、インドネシア各地でこうした儀礼が行われることを望んでいるし、パリサダ・インドネシアもまたそうした考えを

支持している。

この語りは、サブ・レゲール儀礼は「アガマ」に類別された儀礼として、今後はバリのみならずインドネシアのヒンドゥー教徒全体に貢献する可能性に及している。このインタビューの中で、マヌアバは繰り返し「パリサダ・インドネシアはバリの宗教機関でなく、インドネシアのヒンドゥー教の宗教機関である」ことを強調した。この背景には、地方分権化の動きに呼応して、2001年にパリサダ・インドネシアから分裂し、バリにおけるヒンドゥー教の復古主義を唱えるバリにおけるパリサダ・インドネシアの一派が、2007年にバリ独自の宗教機関パリサダ・ダルマ・ヒンドゥー・バリ Parisada Darma Hindu Bali (以下、パリサダ・バリ Parisada Bali と表記する) を設立し (Pemecutan 2007 : XX)、パリサダと対立関係にあったことがあげられる。またマヌアバ自身もパリサダ・インドネシアの要人としてこのセクト間の対立とは無関係ではなかった (Rini, Sudane and Landra 2006 : 8)。

パリサダ・バリは当時、バリで声高に叫ばれていた「アジェグ・バリ Ajeg Bali (本来のバリへ戻ろう)」というスローガンを「アジェグ・ヒンドゥー Ajeg Hindu (本来のヒンドゥーへ戻ろう)」と読み替え、バリの祖先たちにより継承されたものとしてのヒンドゥー教を支持し (Picard 2011 : 134)、インドネシア全体の立場にたつて、儀礼を改革し、新しい要素を次々に導入するパリサダ・インドネシアの方向性に対して反論を唱えていた。しかし、マヌアバはこうした伝統主義的な考え方を強く否定する<sup>18</sup>。

パリサダ・バリの考え方では、サブ・レゲール儀礼は、一部の富裕層が行うだけの魔術や秘儀であり続ける。ヒンドゥー教がインドネシアの宗教であるためには、儀礼は改革され続ける必要がある。パリサダ・インドネシアはそうした基本理念の上に立っている。バリの人々は、こうした新たな方法によって行われる儀礼を必要としているのだ。もし必要としていなければ、なぜ、毎回、儀礼の参加者は増え続けているのだ？

マヌアバはこのようにパリサダ・バリの考え方を否定し、自らが属するパリサ

ダ・インドネシアの理念と自らが改革したサブ・レゲール儀礼の正統性を強調している。

## おわりに

本論では、2009年3月からホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団が主催して実施されたサブ・レゲール儀礼を研究対象として、その新しい儀礼の調査に基づいて、新しく行われた儀礼と従来のサブ・レゲール儀礼を比較してその変化について考察を行った。

その結果、儀礼の実施主体がウク・ワヤンに誕生した者の親族から、財団へと変わり、数百人単位で行われる共同儀礼へと変化した点、高僧ブダングがマンク・ダランに代わって聖水灌頂を行うことで、マンク・ダランの役割はワヤンの上演と人形による聖水の準備に限定された点、そして、パリサダ・インドネシアの協力によって儀礼が遂行されたことで、この儀礼が地方の慣習「アダット」から正式な宗教儀礼となることで、「アガマ」へと格上げされた点について論じてきた。

これらの背景として重要な点は、第一にウィチャクサナによるサブ・レゲール儀礼に関する書籍の出版であり、このことがバリの人々によるサブ・レゲール儀礼の再発見につながり、その結果、ホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団は、参加者の経済的負担の少ないサブ・レゲール儀礼が開催されたのである。その際、この財団の主催者でありパリサダ・インドネシアの幹部であるマヌアバは、教義に基づいて儀礼の規則を変更した上で儀礼を実施し、徐々にサブ・レゲール儀礼の存在とその必要性をバリ社会に浸透させ、パリサダ・インドネシアの協力もあり、「アダット」から「アガマ」へとその位置づけを大きく変えたのである。

ピカールは、パリサダ・インドネシアとパリサダ・バリの分裂に関する研究において、その結論では、バリの諸儀礼の復古主義的な立場にたつパリサダ・バリが誕生し、その組織によって、「アダット」に分類された宗教的行為が再び「アガマ」に格上げされる可能性に言及した (Picard 2011 : 137-8)。同様に筆者も自身の研究において、マンク・ダランの宗教的役割がバリにおけるヒンドゥー組織の分裂により、復権する可能性について論じた (梅田 2006 : 280)。両者の考察は、どちらもパリサダの分裂によって「アダット」が、その規則や方法を変え

ることなく、教義や理念の上で再び「アガマ」へと格上げされる可能性に言及しているが、実際はその予想を裏切り、「アダット」であるはずのサブ・レゲール儀礼は、パリサダ・バリではなく、パリサダ・インドネシアによって「アガマ」へと変貌してしまったのである。そして、その「アガマ」化は、伝統的な儀礼の復興ではなく、その儀礼の規則を教義に沿うように変更した儀礼改革によって成し遂げられたものだった。結果的には、サブ・レゲール儀礼は現代バリにおいて復活し、「アダット」から「アガマ」へと大きくその位置づけを変えたが、マンク・ダランの役割は復権どころか、「聖水の灌頂」という浄化儀礼においてもっとも重要な役割を高僧ブダングに奪われてしまったのである。

## 注

- 1 本研究は日本学術振興会科学研究費による研究「インドネシアの地方分権下のバリにおける文化復興運動と文化政策にみる芸能の変容（基盤研究（C）」（2010年-2012年、研究代表者：梅田英春）の一部として行われた。
- 2 2010年8月26日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団において行った主催者へのインタビューによる。
- 3 2006年に開催された第9回全インドネシア・ヒンドゥー教会議 Mahasabha において、全インドネシアの高僧により構成された組織（Sabha Pandita）の中心メンバーとして選ばれ、続く第10回の会議においても引き継ぎ2016年までの任期で再選されている。
- 4 デワタ・テレビ Dewata TV。
- 5 マンク・ダランのうち特にすぐれた演劇的技量と宗教的知識をもつダラン・ンブ・レゲール *dalang empu leger* だけが、この儀礼を執り行うことができるといわれる。
- 6 1968年に開催されたバリサダの全国レベルの大会において決議された指針 *Ketetapan Sabha Parisada Hindu Dharma ke II no.V/KEP/PHDP/68*の「宗教に関する指針」において言及。
- 7 2010年8月26日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団において行った主催者へのインタビューによる。
- 8 Bali Post（2010年2月1日）に、前日に行われたサブ・レゲール儀礼に関する記事が掲載されており、参加者数はその記事を参照。なおサブ・レゲール儀礼が行われた寺院名は、Pura Windu Segara Campuhan Padanggalak。地域共同体の寺院ではなく、



個人が建立した寺院。2010年当時は、すべての建物は完成しておらず、州政府からヒンドゥー寺院として認可されていなかった。

- 9 Bali Post (2010年8月22日) に掲載
- 10 2010年8月26日の財団でのインタビューによる。
- 11 ダランはイダ・バグス・マンバル Ida Bagus Mambal.
- 12 2010年8月26日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団におけるインタビューによる。
- 13 2011年3月22日、タバナン県トゥンジュク村のダラン、イ・ニョマン・ハルトヌガラ I Nyoman Hartanegara へのインタビューに基づく。
- 14 Wicaksana, I Dewa Ketut. *Wayang Sapuh Leger: Fungsi dan Maknanya dalam Masyarakat Bali*, Denpasar: Pustaka Bali Post, 2007.
- 15 2010年8月26日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団において行った主催者へのインタビューによる。
- 16 サブ・レゲール儀礼に関わるダランは、ブラフマナ階級でなくてはならない点については、この儀礼が行われる約2か月前、アダットや文化を扱うタプロイド紙 Bali Aga に言及されている (Patra 2008: 9)
- 17 2010年8月26日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団において行った主催者へのインタビューによる。
- 18 2010年8月26日にホマ・トゥラヤ・ドゥウィジェンドラ・アチャルヤ財団において行った主催者へのインタビューによる。

## 参考文献

- 梅田英春 2005 「儀礼か、それとも見世物か? バリ島のサブ・レゲール儀礼におけるワヤン上演の変化とその背景」『沖縄県立芸術大学紀要』13: 47-65。
- 2006a 「バリのサブ・レゲール儀礼におけるワヤン演目の研究 イ・マデ・クンバルの上演事例から」『沖縄芸術の化学』18: 67-97。
- 2006b 「「アダット」と「アガマ」のはざままで バリにおける影絵人形遣いダランの宗教的役割の行方」杉島敬志・中村潔編『現代インドネシアの地方社会 ミクロロジーのアプローチ』265-284頁、NTT 出版。
- 鏡味治也 2005 「共同体性の近代 バリ島の火葬儀礼の実施体制の変化を考える」『文

- 化人類学, 69 (4): 540-555.
- Hooyakaas, C., 1973, *Kama and Kala: Materials for the Study of Shadow Theatre in Bali*, Amsterdam and London: North-Holland Publishing Company.
- Parisada Hindu Dharma Pusat, 1985, *Himpunan Keputusan Seminar Kesatuan Tafsir Terhadap Aspek-Aspek Agama Hindu I-XV*, [Jakarta]: Parisada Hindu Dharma Pusat.
- Patra, Putu, 2008, Dalang Wayang Mpu Leger Bukan Tugas Walaka, *Bali Aga*, (Edisi 44/11/VI), p.8.
- Pemecutan, I Gst. Ngr. Oka, 2007, *Perjalanan Parisada Bali (Parisada Dharma Hindu Bali)*, Denpasar: Yayasan Kerti Budaya.
- Picard, Michel, 2011, From Agama Hindu Bali to Agama Hindu and Back: Toward a Relocalization of Balinese religion? Michel Picard and Remy Madinier (eds.), *The Politics of Religion in Indonesia: Syncretism, Orthodoxy, and Religious Contention in Java and Bali*, pp. 117-141, London and New York: Routledge.
- Putrawan. 2009, Nyapuh Leger Massal di Kuta, *RADITYA* 146 : 21.
- Wicaksana, I Dewa Ketut. Wayang *Sapuh Leger: Fungsi dan Maknanya dalam Masyarakat Bali*, Denpasar: Pustaka Bali Post, 2007.
- Rini W., Wayan Sudane and Nyoman Landra, 2006, Mahasaba IX Parisada Sukses dan Mulus: Betul-Betul Menjadi Forum Tertinggi Para Pandita, *RADITYA* 112 : 8-11.